

阿武山たつの子認定こども園「優秀園実践提案研究会」 開催レポート

2021年7月31日（土）、2020年度「ソニー幼児教育支援プログラム」で「優秀園」を受賞した阿武山たつの子認定こども園による、「優秀園実践提案研究会」を開催しました。

新型コロナウイルス感染防止のため、Zoomウェビナーによるオンライン形式での実施となりました。全国の認定こども園、幼稚園、保育所等の教育・保育関係者、および異業種の方も含め約100名（端末数）の参加がありました。

以下に阿武山たつの子認定こども園による開催レポートを記載いたします。

発表会概要

1. 日時：令和3年7月31日（土）13:00～16:00
2. 開催形式：Zoomウェビナーによるオンライン開催
3. 主題：「科学する心を育てる」～気づきのタネを子どもが育てる環境づくり～
4. 主催：社会福祉法人照治福祉会 阿武山たつの子認定こども園
5. 共催：公益財団法人 ソニー教育財団
6. 講師：大豆生田 啓友氏/玉川大学 教授
瀧川 光治氏/大阪総合保育大学 教授
7. プログラム
13:00 開会のご挨拶/本日の流れ
13:10 協議「実践者が語る論文の裏話」と瀧川教授からの指導講評
14:10 休憩
14:20 大豆生田教授と実践者の鼎談による「科学する心を育てる」保育の深掘り
14:50 参加型質疑応答/瀧川教授による解説（ZoomのQ&A機能を使用）
15:15 瀧川教授によるまとめ
15:30 大豆生田教授によるまとめ
16:00 閉会のご挨拶

実践発表

冒頭、園の環境と子どもたちの遊びの様子を動画で配信した。続けて、2020年度の応募論文より、「雨っておもしろい！～雨から広がる子ども世界～」「雲の不思議～なんで？どうして？がいっぱい～」の2つの事例について、雨や雲に興味・関心をもった子どもたちの遊びの展開を保育者の心の動きも絡めて、それぞれの担任から園内研修の形で発表した様子を配信した。

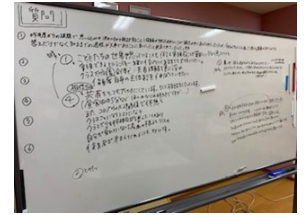


特に、子どもたちの発見や気づきに保育者がどのように思いを寄せたのか、また、どのように成長を喜んだり、その後の展開に悩んだりしたのかをありのまま報告した。そして、子どもたちの「科学する心」を育むために、子どもたちの目線に立ち、どのように環境を工夫し、保育を展開していったか、論文に書き表せなかった裏話を中心に語った。



協議会（質疑応答）

事前に、参加者に受賞論文及び発表資料を読んでいただき、予め質問を受け付けるとともに、当日もチャットで質問を受け付けた。以下の質問について、担当者より具体事例を通して返答した。



質問1：日々の保育の中で、迷ったり、これで良いのか？と感じたりしたときどのように解消されていますか？また、同じクラスの先生との共有や話し合い時間はどのように取られていますでしょうか？

回答1：担任間の共有をととても大切にしています。相談もよくし合っています。昼食の5分の時間などで行うこともあります。只今、コロナウイルスの関係で休憩を各部屋（クラス）で行っているため、クラスで話す機会が増えました。他の保育者から、自分が見ることができていない場面での様子を教えてくれることも多いです。

質問2：集いの時間や実験に興味のない子ども（他の遊びに夢中）、支援児の子は、いましたか？その子どもたちはどうしていたのでしょうか。

回答2：興味のない子ども、支援が必要な子どもはいましたが、しつこく参加させるなどの対応はしませんでした。いつも集いに参加することが難しい子どもは、双眼鏡作りが楽しかったようで、活動が終わってから何度も双眼鏡で空を見ていました。担任には全員で参加してほしいという思いもありますが、その子どもが興味をもったこと（瞬間）を大切にしたいとも思っています。

質問3：集いの時間に、子どもたちがお互いの話をしっかり聞いていました。日々の積み重ねだとは思いますが、どのような事に気をつけて「集いの時間」を進められていますか？

回答3：子どもたちが「話したい」「話を聞くことが楽しい」と思えるような時間にしようと日々工夫や試行錯誤をしています。例えば“見る”ということが好きな子どもには、人形劇をしたり、ダンスで伝えてみたりしながら、方法はたくさんあることを意識して楽しい集いの時間を設けようと心がけています。

質問4：子どもたちと意見を共有する際、意見のぶつかりなど様々な姿が見られましたが、どのように話をすすめていくのか、工夫されていることはありますか？

回答4：その子の意見を大事にしていますが、意見を出し合う中で「○○なわけないやん！」と時には友達を否定するような声も聞こえてきます。でもその時に大事にしていることは、皆の前で何かを発言しようと勇気を出してくれたこと、一人一人思いは違うということを知り合えるように、友達に寄り添う気持ちを作れるようにすることです。

質問5：子どもたちの声を拾ったり、興味・関心をキャッチしたりするために、日々心がけていらっしゃることは何ですか？

回答5：子どもたちの世界を一緒に楽しむこと、子どもたちの声をよく聞き見守ること、子どもと遊ぶこと、これらを大事にしています。

指導講評

瀧川 光治氏/大阪総合保育大学教授

一般的な公開保育・実践発表では表向きの言葉で語ることが多いが、今回の動画の中では先生方が本当に迷い、葛藤している背景が見えた。保育の新しい価値観に気付いてしまったが故に、今まで当たり前にしてきたことが分からなくなる。しかしそれが謎のままで終わるのではなく、実際の子どもの姿、自分の予想とは違う子どもの行動を見ることでその発想の面白さに気づき、視野が広がる。子どもの遊びを面白がることから子どもの素敵どころが見え、それが先生方の誇りに繋がってくるのではないかと思う。



視聴者の方からの質問の中に「評価」という言葉が出てきた。小学校以上であればきちんと基準を設け、それに照らして子どもの育ちを評価するが、保育の営みにおいては「評価」というよりも「子ども理解」と呼ぶ方が良いかと思う。子どもの気づきを立ち止まって捉え、考えてみる。それは子どもに対する評価ではなく、自分の保育に対する自己評価ということになる。2008年改訂の保育所保育指針の中で、先生の自己評価が大切だと言われるようになった。さらに今回の改訂で、「評価と改善のサイクル」が強調されている。これは子どもの評価・改善ではなく、保育者自身の自己評価から、次回への改善策を考えていくということである。その点から考えるとやはり、子どもの科学する心をどう捉えるかという「目」が大事なのだろうと思う。

そこで今回の論文からポイントをいくつか拾い上げてみる。

1つ目は「子どものふとした言葉がきっかけになる」ということである。雲の事例の中で「飛行機雲があるから明日は雨やなあ」という言葉があった。この言葉がなかったとしても保育は日々進んでいくわけだが、先生が「え、どういうこと？」と引っかかり取り上げたことがきっかけとなり保育が展開していったことを考えると、子どもの言葉や吹きは保育の始まりになり得るとても大切なものであると言える。

2つ目は「子どもの気づきや思い、興味をつかまえることの大切さ」である。「雨の量をはかる」「雨水と水道水に絵の具を垂らしてみる」などの取り組みは、子どもたちが興味・関心をつかまえたからこそのものである。興味・関心がないのにやってしまうとやらせのような保育、先生が引っ張りすぎる保育になってしまう。

3つ目は「先生としての予想・想定からはみ出た子どもの姿をつかまえて面白いと思えるかどうか」である。通常やりやすいのは先生方の想定内ですべてが進んでいく保育だが、自分の価値観に無いのはみ出た言葉・姿を面白いと思いキャッチしたからこそ今回のような保育が生まれたのだと思う。「科学する心」という視点からさらに考えると、子どもの問いや疑問を解決していくプロセス自体が「科学する心」にとって大切なのではないか。平たく言うと子どもたちの「？」が「！」へ変わっていくような体験を大事にしながら今の保育が進んでいるのだと思う。4つ目は「子どもには子どもの考え・論理がある」ということである。例えば雨水が溜まった後の棒グラフをどうするかという部分で、先生が用意したのは紙テープで直線に貼った見やすく分かりや

すいグラフだったが、子どもたちは自分なりに横向きに積み重ねるようにして貼っていった。

正確な長さよりも「いっぱい」ということを表現したのだと思う。また「水蒸気は上にいくのか曲がるのか」という話し合いの中で、雲は外にできるのだから水蒸気も外にいかなければならない、では部屋に水蒸気はあるのか、もしあったとするとそれはどうなったのかと考えた時に、子どもたちから出た「窓から外にシュッと逃げる」「煙突から逃げていく」等の意見からわかるのは、「水蒸気は移動するものなんだ」「水蒸気はどうやら空の高いところに行くものなんだ」ということが理解できているということである。子ども自身が既知っていること、新たにやってみる中で気付いたりわかったりしたことが子どもの考えや論理になっている。子どもなりの考えをいかに尊重するか、見つけるか、そしてそれをどう保育に生かしていくかが大事である。

保育のダイナミックな面白さに繋がることとして、「子どもの興味に保育者が巻き込まれている」「保育者が提案したことが子ども主体に切り替わっていている」という話があった。科学する心を育むとき、その主体は子どもであるが、一方で保育者は単にそれを見守っているわけではなく、見守りながらも実は時々提案したり、子どもと一緒にもつれ合ったりしながら保育は展開していくと感じた。動画の中で大豆生田教授のおっしゃった「子どもの主体性と保育者の主体性をセットで考えることが大事だ」ということにも繋がっていくと感じた。

またこの園の良さとして、3・4・5歳児の異年齢だからこそその継続があるという点が挙げられる。3歳の時に年上の子たちの様子を見ていた子が、4歳になってやってみようとする。その様子をまた次の学年の子が見ているというように、異年齢で過ごすからこそ、去年は目で見て吸収していたのが、成長とともに自分でやってみようとする姿が出てくる。そういった「遊びの文化の伝承」がこの園にはある。昔は外で地域の子どもたちと遊び合う姿があったが、今の時代はそれがどんどん減ってきている。園の中で遊びをどう伝承していくのかという時に、先生方と園児たちがこの園の保育を作り上げているのだと思う。

まとめ

大豆生田 啓友氏/玉川大学教授

今回、阿武山たつの子認定こども園の先生や保育内容について全く知らないまま論文を読ませていただいた。瀧川先生が「子どもの姿に心を動かしながらドキュメンテーションを作ったり保育を進めたりしていく」という話をされたと思うが、まさにそのことが、実際に声を聴くことで論文を読んだ時よりも遥かに奥深く見えてきた。



保育の記録にはもちろん事実も書くのだが、そこに保育者の思いが入ることの大切さが今回先生方の声を聴くことで見えてきた。それが「科学する心」なのかどうかは別として「保育を物語る」という観点が保育にとってとても大事なのだと感じた。

また保育の評価について、瀧川先生が明快に答えてくださった。私は厚労省の自己評価ガイドラインの作成に関わってきたが、今まで「評価」と言うと「子ども・先生は何ができているか」のチェックのようなものであった。もちろんそういう側面もあるのだが、先生たちが子どもたちの姿を見ながら自分たちの保育を振り返

ることそのものが評価であり、自己評価と改善のサイクルなのだという事である。

そしてまた、自己評価ガイドラインの中でも今回の保育実践の中で先生方が特に大事にしている項目が、それを自覚しているかどうかは別として恐らくあったらと思う。例えば「子どもたちがワクワクしながら気づきや発見を探求していくことを大事にしたい」「保育者も一緒にそのことにワクワクしながら保育をしたい」などといった観点が、言い換えれば「評価」にもなってくるのかなとも思う。「評価」とはまさに私たち自身が子どもの姿を見て振り返っていくプロセスそのものなのだということが大切だし、その大切さを先生方が普段から瀧川先生も交えながら共有している点も良さだなあと思う。

最後に、今回「雨」や「雲」などという「科学する心」の中ではあまり出てこないテーマが新鮮だった。しかし考えてみれば、雨や雲は本来、子どもたちの日常生活の中にあることなので、その意味ではテーマとしてあがってくるのはその通りだよなと思われた。そう考えると瀧川先生もおっしゃったように、自分たちの既定路線ではないところのテーマがあがってくるということも大事な事である。しかし一方で、こちら側がどう受け止めて返すかによって流れも変わってくるので、ともするとファンタジー一辺倒になってしまう実践もこれまで多かったのではないかな。もちろんそれも悪いわけではないし、今回の実践の中にもファンタジーが入り混じっている場面はあったが、子どもたちの知的な探究もまた大切にしたいというのがとても重要な点だったと思う。

おわりに

研究発表を行うにあたり、他園の皆さんの発表をいくつも拝見しながら話し合いを重ねました。「どんな発表をしたいか」「自分たちだったらどんな発表を観たいだろう？」ということを中心に据えた時に、我々は現場の保育者の皆さんに向けて、論文の限られたページ数には収めきれなかった執筆の裏側や、その時の保育者の気づき・工夫・発見・思いを伝えたいのだということが見えてきました。

そうすることが明日の保育の希望になったり、これから初めて論文を執筆される方々へのヒントになったりすれば良いなという思いがありました。そしてそのためには、ライブで緊張した状態で話すのではなく、普段から園で一緒に働いている同僚に語り掛けるような形で、あらかじめ録画したものを観ていただくのが一番良いのではないかと結論に至りました。

そこで、瀧川教授にも参加して頂きながら園内で収録を行い、その映像を編集しました。完成したものを大豆生田教授にご覧いただきました。そして、Zoomにて大豆生田教授と鼎談させていただき、その様子をまた録画・編集。合計2本の動画を作成して、当日皆さんにご覧いただきました。

研究会当日は職員計8名と瀧川教授が園に集まり、大豆生田教授にもZoomにてご参加いただきました。あらかじめ映像を用意したことで、ライブでお話しする部分とのメリハリが生まれ、職員の心にも多少の余裕が生まれたように思います。

アンケートでは温かい声をたくさんいただきました。ありがとうございました。

(阿武山たつの子認定こども園)